

片木 敏夫

1923.8.23-1995.12.6

かたぎ・としお

経営者、大阪府泉南郡（現泉南市）信達町に父篤太郎（1887-1949）母おしよの男4人女1人の長男として生れた。古くからの中農家だったので大阪府立農学校（現農芸高校）に進むが、理工科志向に変り卒業後東京物理学校（現東京理科大学）理工学部に入り1945（昭20）年卒業した。父が経営する鉄工所を引継ぐが、戦争末期で高田アルミ（現昭和アルミ）の飛行機部品の加工下請をし、これがアルミニウムとの出会いとなる。

1948（昭23）年アルミ板を仕入れプレス機で家庭器物類を造り、クロス・スターを商標として売出した。1953（昭28）年二段圧延機を設備し、地金溶解から月15噸を目指しアルミ小板、サークルを製造し、自家製器物を使うと共に外売にも乗り出すが、これを機に有限会社から株式会社片木アルミニューム製作所（資本金500万円）に組織替して圧延メーカーの仲間入りすることになる。この時30才で、陣容、資金、販売いずれの点でも十分とは行かず、苦闘が続くが、毀譽褒貶を気にせず、一途に直進を続け、1959（昭34）年水冷式連続鋳造設備、3段熱間圧延機、翌60（昭35）年4段レバシングミルを新設した。アルミ需要の急増にも支えられ1964（昭39）年新工場を建設、67（昭42）年には自らの設計による四段圧延機を増設その他諸機械を設備し、月間100噸体制をしき、1971（昭46）年昭和電工から資本参加を得、内部充実につとめ、関西における中小一貫メーカーとして独自の地位を占めることになる。

一方力を入れたものに発展途上国向圧延プラントの輸出がある。1951（昭26）年ある眼鏡雑賀の貿易商がビルマ（現ミャンマー）ラシガーンのホッタア・メタル社（Khittaya·Aluminum·Works）からのアルミ圧延機の引合を寄せてきた。それは技術指導も兼ねたもので、タイムリーに成約が出来、翌52（昭27）年工具を伴い現地にて機械の据付操業を指導し、同国における最初のアルミ圧延工場となった。これに引続いて1957（昭32）年タイ国バンコックのタイ・メタル（Thai metal works、現在のVaropakorn Public Co.,Ltd.）と、1972（昭47）年には韓国、大邱市の朝日アルミニューム工業㈱との間に圧延機一式の輸出契約が出来、今日においても両社とは親密な関係にある。1975（昭50）年から1987（昭62）年にかけてもインドネシア（P.T.Aluminum works）、台湾、中国の4社向けにアルミ板・伸銅品圧延機が輸出されている。

その間東奔西走、全く席の暖まる暇もない状態が続き1986（昭61）年鳥取県大山町に新工場（大山工場）を建設し、新しい展開を行う。その頃から心臓病を患い、入院加療をつづけるが、雄団なれば72才で逝去した。未亡人美良が社長となり次男威と共に遺志を継いでいる。雑誌『軽金属時代』309号、1960年4月号に「南洋諸国のアルミニウム工業」の寄稿がある。



◆私は書道の心得があるので『アルトピア』の表紙に何か書くよう頼まれた。それで“飛雲”と書いてみた。昔の日本人は雲を愛した。雲に隠れる月に秋の風情を楽しみ、紫立ちたる雲の細くたなびきたる様に春の気配を感じとってきたのである。飛雲には、そうした静かな雲とは違う、躍動する美がある。例えれば、天高い所に群れをなす雲が、おりからの風に誘われて足早に駆けていく姿とでも言おうか、急速な発展を遂げてきた日本経済の雲行きもいささか怪しくなりつつある。今また一層の飛躍を期待して、飛雲と揮毫する所以である。

（片木敏夫「表紙に寄せて」『アルトピア』15巻8号、1985年8月号）

◆私が片木敏夫社長と知り合ったのは1971年4月初でした。当時私の朝日アルミニューム工業㈱はアルミ板の生産能力年2400噸でした。以後一次増設で12,000噸、2、3次にわたり現在は年160,000噸を製造しています。片木社長には一次増設の時、設計、建設そして技術指導をお願いしたのです。それによって朝日アルミ発展の基礎がきずかれましたし、大韓民国のアルミ圧延工業の大きな転換期となったのですから忘れることの出来ない方と言ってよいと思います。

片木社長の発案で、片木アルミニューム、朝日アルミニュームとタイの VAROPAKORN Public Co.Ltd でアジアアルミニューム技術開発協議会が出来ました。この三社は毎年1、2回技術者の相互交換、技術相談、世界のアルミ中堅メーカーとして業界に大きな寄與をしています。

片木社長は余り大きな体格の方ではありませんが、親切で、温和な姿は誰にでも親近感を與える、典型的な日本人で、いつも前向きで、常に研究をつみ、意志が強く、又決断力を持った人でした。

1985年心臓病で闘病中なのに、本社工場を移転するため、大山町に30,000坪の敷地を準備し、第二工場を完成させました。社長が平素よく口にしたのは「無限」であり「躍動」ですが、「躍動」の書を額縁に入れて下さいました。私も社長と同じ様に無限と躍動を生きていく目標にしています。

社長は私に機械と技術を與えてくれたという單なる商売上の人ではなく、事業家としての先輩・先生と言ってよい人です。多情多感で家庭的でもある方で、私には兄弟のように思えてなりません。逝くなつて5年経ちますが、今でもその姿を思い出し多くの教えを忘れず、前進をつづけています。ご冥福をお祈りし、会社の発展を祈って止みません。

（李在燮 Jae Sup Lee（㈱朝日アルミニューム工業所代表理事）
「片木さんを想う」2000年2月）

小寺純雄「日本の軽金属人」

『アルトピア』30巻4号、PP.48-49、2000年4月号、

カロス出版